



Title	術語としての「むすび」の成立：宣長以前と宣長の比較を通じて
Author(s)	河野, 光将
Citation	語文. 2026, 124-125, p. 143-133
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/103856">https://doi.org/10.18910/103856</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 術語としての「むすび」の成立

—宣長以前と宣長の比較を通じて—

河 野 光 将

## 1 はじめに

近世期は社会的安定を背景として、経済、学問、芸術といった様々な分野が発展した時代である。日本語研究に関わる部分について言えば、それまで堂上の貴族に伝えられていた秘伝が地下歌人へと伝わっていったことは非常に大きな変化であった。歌学の裾野が広がったことによって、閉鎖性がその価値を担保していた秘伝に対する批判も見られるようになり、それらは国学者による日本語研究へと発展していく。とりわけ、本居宣長の日本語研究は近世期を代表するものであり、後世への影響という観点からも日本語研究史上、極めて重要である。

宣長の研究は幅広い範囲に及ぶが、てにをはに関する研究についてはそれまでのてにをは研究が各てにをはに対する個別的な記述に留まっていたものを、法則として体系的に捉えようとした点に特徴がある。従前の日本語研究史においては、こうした宣長の研究に対し、ある種の断絶ともいえる飛躍的發展といった評価をされてきた。<sup>(1)</sup>確かに「係り結び」は現在でも学校で教えられているものであり、宣長の功績の一つであると言えよう。ただ、宣長の段階では、まだ「係り結び」という術語は成立しておらず、あくまで「かかり」と「むすび」に分かれて用いられていた。こうした術語の問題は一見すると瑣末なものに思われるかもしれないが、どういった術語を用いるのかは、書き手の考えが反映されたものであろうし、学説の継承関係という側面からも重要である。

そこで本稿は、宣長が創出したとされる「むすび」に着目し、まず、宣長以前の研究における「むすび」に相当する術語について概観する。その上で、宣長自身の研究における使用状況を調査し、学説の影響関係について考察をおこなう。

## 2 宣長以前の終止に関する術語

宣長以前のてにをは研究として、ここでは『春樹頭秘抄』『春樹頭秘増抄』『和歌八重垣』『氏爾乎波義慣鈔』『てには綱引綱』の5書を取り上げる。それぞれの基礎的情報は以下(【表1】)の通りである。なお、術語の調査に際しては、例えば「と

まり（とめ、とどめ）」と「とまる」といった、名詞と動詞の差は捨象してひとまず同一のものとしてまとめている。<sup>(2)</sup>

【表 1】 調査対象てにをは研究書の基礎的情報

書名	成立年代	著者	終止に関する術語
春樹顕秘抄	室町末期	未詳	とまり・おさへ
春樹顕秘増抄	江戸初期	有賀長伯	とまり・おさへ
和歌八重垣	元禄13 (1700)	有賀長伯	とまり
氏爾乎波義慣鈔	宝暦10 (1760)	雀部信頼	とまり・うくる
てには綱引綱	明和7 (1770)	梅井道敏	とまり・おさへ

5 書を通じた全体的な特徴として、基本的に使用されるのは「とまり」という術語であって、用例数も圧倒的に「とまり」が多い。この点については、『姉ヶ小路式』の流れを汲む『歌道秘蔵録』の「そるこそれおもひきやとははりやらんこれそいつゝのとまりなりける」という和歌にも「とまり」が用いられており、終止形式に「とまり」を用いることは一般的であったといえよう。ただし、これは現在言うところの「結び」とは異なり、終止形式に広く用いられる点には注意が必要である。例えば、『春樹顕秘抄』には、

第十三 比とまりの事

三嶋江のにはほのうすきのみたれ芦のすゑにはかゝる五月雨の比 (p.106)  
とあり、係り結びとは無関係なものにも「とまり」という術語が用いられている。

次に、「おさへ」について見ていく。『春樹顕秘抄』では、

第二 そと云事

此そにあまたのとまりあり

五音第三の音にてをさへたり。第三の音とは、うくすつぬふむゆるう

○我そとふ ○花そさく ○浪そたつ (p.94)

とあって、一見すると現在いうところの「結び」に対応する語に「おさへ」という術語が使用されているかに見える。しかし、別の箇所には、

我恋のあらはにもゆるものならばみやこのふしといわれなましを

是等しをとをさへてことほる姿也 (p.103)

とあって、形態素境界を無視して単に「しを」という文字列で終わるといった意味にも用いられる。また、別の箇所には、

第十五 見ゆと云手爾葉の事

△五音第三の音にて可留

うくすつぬふむゆるうにておさへて、みゆとむるなり。たとへは箱根路を

我越えくれは伊豆の海やおきの小嶋に波のよる見ゆ (p.108)

とある。「おさへ」と「とまり」が両方用いられており紛らわしいが、証歌を参考にすれば、「波のよるみゆ」の「る」が「おさへ」となり「みゆ」で「とまる」ということを意味している。一方で、「五音第三の音にて可留」とあることから、『春樹顕秘抄』において「おさへ」と「とまり」の間に厳密な区別はないと考えられる。この例のように、終止形式に関わらないようなものに「おさへ」が用いられる点については、劉 (2012) に「姉小路式」においては、「かかへ」・「おさへ」の両者は区別なく用いられている」とあって、『春樹顕秘抄』もそれを受け継いでいると言えよう。

これが『春樹顕秘増抄』になると、「かかへ」と「おさへ」の区別が見えるようになる。「凡例」には、

一、かゝへのかな、をさへのかな、といふことあり。かゝへは上にあり。をさへは下にあり。たとへはらんとをさへむとては、上に、やかいくいかになどうたかひの文字にてかゝゆるをいふ。又上にこそとかゝゆれば、下にれめねとをさへ、そとかゝゆればとをさゆるたくひなり。(p.120)

とあって、「かかへ」と「おさへ」の定義が明確化されている。ここでの「おさへ」を見ると現在の「結び」を指すようにも見えるが、別の箇所、「しくれぬとみゆる空かな雁なきて色つく山の秋のむら雲」という和歌に対して「雁鳴て色つく山とをさへたり」という記述が見えるため、「結び」と相当する術語とは言えない。同じく有賀長伯の手にかかる『和歌八重垣』には、「おさへ」という術語は見えない。これは、『和歌八重垣』が一般向けの啓蒙書として書かれたことが影響していると考えられる。

次に『氏爾乎波義慣鈔』を見ていくと、こちらも基本的には「とまり」が用いられているが、2カ所のみ「うくる」という言葉が用いられる。

曾にかよふ毛あり。五音第三の音あるひは幾とうくる

秋ちかく野は成にけりしら露のおける草場もいろかはりゆく

(中略)

之毛とやすめたるも五音第三のおんにてうくる事あり。(pp.344-345)

他の似た箇所では、「とまる」を用いているので、この箇所のみ「うくる」が用いられる理由については判然としない。

最後に、『てには網引綱』について述べる。この書は、宣長の蔵書目録にも見えるものであり、山田 (1943) は、本居家の蔵書印が押された『てには網引綱』を購入したことに触れつつ、『てには網引綱』と『詞玉緒』の構成の類似点について指摘している。さて、本書も基本的には「とまり」が用いられるが、1箇所のみ「なり」

の項目に、

也は上を結ぶ辞也。けりはさしつめて優ならず。なりは平かにすらりととむる辞也。又なるはつまりて急也。なれはのひて緩か成へし。(p.36※波線は筆者による。以下同様)

と、「結ぶ」という言葉が用いられている。ただ、証歌も挙げられておらず、他に例もないため、ここでの「上を結ぶ」が指す内容は判然としない。なお、「結ぶ」という形ではないものの、「けり」の項目には、

けりは結語の辞也。強き辞也。へけるへけれは緩急あり。そといへはけるとおさゆるはつまりて急也。こそといへはけれといふはとまらさる意にして緩なり。(p.34)

とあって、「結語」という語が用いられている。ただし、このことをもって宣長がいうところの「むすび」との影響関係を考えるのは拙速に過ぎよう<sup>(4)</sup>。仮に道敏がそれまでの「とまり」や「おさへ」ではなく、新たに「むすぶ」「結(語)」という術語を創出したのだとすれば、他にも使用されてしかるべき箇所<sup>(5)</sup>に用いられていないことの理由が説明できないため、ここでの例に特別な意味を見いだすことは慎重になるべきである。

以上、宣長以前のをは研究書の記述について概観してきた。簡単にまとめると、宣長以前の段階においては『姉小路式』など中世歌学の伝統を受け継ぎ、終止に関わる術語してもっぱら「とまり」が使用されるということが出来る。また、「おさへ」については、緩やかな傾向として、係助詞「ぞ」と「こそ」に関する項目に用いられることが多いということでは出来るが、「とまり」との違いが明確化されているわけではなく、その使用においても特段区別して用いられているとは言い難い。

### 3 宣長の著作における終止に関する術語

#### 3.1 『てにをは紐鏡』

『てにをは紐鏡』(明和8(1771)年)は、呼応関係による語の形態的变化を一枚の図表として一覧できるようにしたものである。詳細な説明については、後に取り上げる『詞玉緒』が担っており、『てにをは紐鏡』自体には、多くの説明があるわけではない。さて、『てにをは紐鏡』で用いられる終止に関わる術語としては、「むすび」と「とまり」の2種のみが見え、宣長以前のをは研究書に見えた「おさへ」は全く見えない。それぞれの使用数は、「むすび」3例に対し、「とまり」13例となっており、「とまり」の方が多く用いられている。これは、前節で概観したように宣長以前のをは研究書においては、「とまり」という術語が広く用いられていた

ことと関係しており、宣長の研究もそれまでのてにをは研究の流れを受けていることの証左であろう。むしろここで注目すべきは、「むすび」という術語の使用数が少ないことである。『てにをは紐鏡』において、「むすび」が使用されているのは、初めに掲げられた書名とそれに伴う和歌の部分、

てらし見よ本末むすぶひも鏡三くさにうつるちゝの言葉を  
に見える 1 例と、最後に置かれた本書の意図について述べた部分、

此書は、上のてにをはに従ひて、けりけるけれあるはらんらめなどやうに留り  
もうごくかぎりをあげて、其定れる格をさとさんと也。そは留りのみならず詞  
のきるゝ所は、いつくにてもみな同じ格ぞ。さて此外に、かなつゝましらしの  
たぐひのうごかぬ辞はしるさず。されど、それも定れる格は有也。又こゝにし  
るせる辞の中にも此定れる格をはなれて用たる変格もあり。たとへばへいくよ  
ねざめぬすまの関守とよめるなど上にいくとあれば必ぬるとむすぶ格なるをぬ  
とむすべるたぐひ也。かうやうの類はたいと多かれど、今くはしくはつくしが  
たし。すべててにをはの猶くはしき事は吾党棟隆が三集類韻とおのがかける言  
葉の玉の緒といふ物になんいへる

に見える 2 例であって、書名に関わる和歌に「むすび」を用いているにもかかわらず、意外なほど少ないのである。

### 3.2 『詞玉緒』

前節で確認したように、『てにをは紐鏡』では「とまり」の方が多く使用されていた。しかし、『詞玉緒』（天明 5（1785）年）になると状況は一変する。具体的に『詞玉緒』における例を確認していく前に、まずは『詞玉緒』の構成について簡単に確認しておきたい。先の述べた如く本書は『紐鏡』と対になるものであり、『紐鏡』の末尾にも書名が挙げられており、『紐鏡』に対する詳細な説明を加えたものということができる。構成については全 7 巻でそれぞれの巻の内容を目録に従って簡単にまとめると次の通りである。

【一の巻】 惣論・三転証歌

【二の巻】 とまりより上へかへるてにをは・重なるてにをは・変格・本歌にゆづる  
格・てにをは不調歌・一本にてにをはを写し誤れる歌

【三の巻】 は・ば・も・ぞ・の・が

【四の巻】 や・か・何

【五の巻】 こそ・と・ど・を・に・て・で・な・み・よ・ね・し・らく・まく・け  
く・かし

【六の巻】 むすびことば

【七の巻】 古風の部・文章の部

『詞玉緒』における終止に関わる術語は、『紐鏡』同様に「むすび」と「とまり」の2種のみが用いられる。それぞれの用例数を巻ごとに見ていくと次のような結果となった（【表2】参照）。

【表2】『詞玉緒』における「むすび」「とまり」の用例数

巻	「むすび」	「とまり」
1	45 (100%)	0 ( 0%)
2	30 (66.6%)	15 (33.3%)
3	49 (73.1%)	18 (26.9%)
4	46 (88.4%)	6 (11.5%)
5	34 (97.1%)	1 ( 2.9%)
6	31 (83.8%)	6 (16.2%)
7	58 (92.0%)	5 ( 7.9%)
合計	293 (85.2%)	51 (14.8%)

これを見ると、『紐鏡』においては「とまり」が多く用いられていたのに対し、『玉緒』では「むすび」が多く用いられるようになる。特に、一之巻については「むすび」のみが使用され「とまり」は1例も使用されないといった特徴がある。その一之巻「惣論」では、

○紐鏡の三條の大綱とは。右<sup>みすじ</sup>は<sup>おほづな</sup>徒<sup>ただ</sup>とは はもぞのや何こそなどいふ辞のなきを今かりにかくいふ也。】の結び一條。中<sup>むす</sup>の<sup>むす</sup>何<sup>むす</sup>【いかにいくたれの類みな同じ。】の結び一條。左<sup>むす</sup>こそ<sup>むす</sup>の結び一條。此三條にして。これなんてにをはの<sup>おほむね</sup>大旨なりける。結びとは。言のとちめをいふ。さるは<sup>ひとうた</sup>一首のとちめのみにもあらず。いづれの句にまれ。語の<sup>き</sup>切る、所は。皆そのとちめにて。上におけるてにをはの<sup>むす</sup>結びなり。(p.18)

として、「むすび」の定義が述べられる。また、「惣論」の最後には、

○すべて此書に。あるひは三転。或は結び辞。或は変格。あるひは嘆息のや。などといへるたぐひの名目は。おのが今あらたにまうけたる也。すべて物をくはしくをしへさとすには。かならず何くれの名目をたてて。事をわかたでは。さだかにしめしがたき事おほかる故に。やむことえずで。かりにまうけつる物ぞ。かならず人の耳をおどろかさんとて。よにことなることをこのみてにはあらず。きゝなれずとて。なおもひとがめそ。(p.21)

とあって、「むすび」という術語を新たに作り出したことを述べている。

しかし、二之巻以降になると、「とまり」も用いられるようになる。<sup>(5)</sup>ここで問題となるのは、「むすび」と「とまり」に使い分けがあるのかという点である。この点について、例えば、三之巻「ぞ」に関する説明の中には、

○動かぬ言にて結ぶぞ

神無月しぐれふりおけるならの葉の名におふ宮のふること<sup>㊦</sup>これ

ぞこれと留りたる歌万葉にもこれかれ見ゆ。又ぞといはずしてこれと留りたるも万葉廿の巻に見えたり。(p.102)

とあって、見出しには「むすび」を用いている一方、証歌に対する説明の中には「とまり」が用いられている。また、二之巻「変格」の項目には、

いにしへを吹つたへたる笛竹にさへづる鳥の音さへかはら<sup>㊦</sup>

うめの花香をのみ袖にとゞめ置てわが思ふ人はおとづれもせ<sup>㊦</sup>

春の日のながらの浜に船とめていづれか橋ととへどこたへ<sup>㊦</sup>

上件の歌どもいづれも皆。終りの句に嘆息の意ありて。留りの下に。かな又よなどいふ辞を加へて聞く意也。この故に定まりのごとく。ぬつなりけりせりるずなどと結びては。かへりてよろしからず。(p.70)

とある。一見すると、「定まり」に従っているものには「むすび」を用い、「定まり」から外れたものに対しては「とまり」を用いていると見えなくもないが、初めに示される「変格」の説明の中に、

これは上にぞのや何等の辞をおかずして。ぬるつるなるけるせるるゝぬ【不】し【過去】などと結びて。定まれる格にはづれながら。てにをは不<sub>レ</sub>調とは聞えぬ歌共を。今かりに変格となづけて。こゝに出せり。(p.68)

とあることから、「定まり」から外れたものにも「むすび」が用いられており、これらを踏まえると、「むすび」と「とまり」に積極的な意味の違いはないと考えられる。<sup>(6)</sup>

『玉緒』において「むすび」と「とまり」は術語として区別して用いられているとは考えにくいことについて確認したが、別の観点から「むすび」と「とまり」について述べると、この2つの術語が一つの説明の中に同時に使用されることは極めて少ないということを指摘できる。上に挙げた例は、数少ない同時使用の例であり、こうしたものは『玉緒』全体を通して見ても10例もない。

以上、『詞玉緒』における「むすび」と「とまり」について見てきた。その結果、『玉緒』においては、①「むすび」が多く使用されていること②「むすび」と「とまり」の間に積極的な意味の違いは見られないということ③「むすび」と「とまり」が同時に用いられる例が少ないことを確認した。次節では、『紐鏡』では「とまり」が優勢であったのに、『玉緒』では「むすび」が優勢となる変化が生じた理由について

て考察を行う。

#### 4 考察

術語としての「むすび」と「とまり」の使用数が『紐鏡』と『玉緒』で変化していることについては、学説展開という観点から見て重要な問題である。この問題を考えるにあたっては、『紐鏡』の欄外に記された説明と、おなじ項目に対する『玉緒』の記述との比較が参考になる。

『紐鏡』の初め五段には、形容詞のク活用、ク活用型助動詞、形容詞のシク活用、過去の助動詞「き」が掲げられており、その説明には、

此五段のしときとの留りをよくわきまふべし。たがひにまがひやすきてにをは也。古への歌は、すべて此格のたがへる事はなきを、近代の歌には此格にかなはぬが多きは、みなあやまり也。

とあって、「とまり」が用いられている。一方で、ここに対応する『玉緒』の記述には、

○おほよそしときと相転る言に一二つのかはり有。一には紐鏡第一段。右の行<sup>り</sup>し。中の行<sup>り</sup>き。【左'行はしけれ也。】これ也。二には第二段。右の行<sup>り</sup>し。中の行<sup>り</sup>しき。【左'行はしけれ也。】これなり。三には第三段。右の行<sup>り</sup>き。中の行<sup>り</sup>し。【左'行はしか也。】第四段第五段は第三段に同じ。さて此三つの中に。上二段【第一第二】のしは。いはゆる現在のし。下三段【第三第四第五】のしは。いはゆる過去のしなり。【後世の名目に。しにのみ現在過去の称有て。きには此称あることをきかず。そも／＼此五段ともに。しときとは。たゞその言の切るゝと。下へつゞく所とのけぢめにて。上のでにをはにしたがひて。かはるのみにこそあれ。意は全く同じくて。きにもしのごとく。現在過去の意はあれば。上二段のきは。現在のきといふべく。下三段のきは。過去のきといふべきにこそ。】かくて上二段は。はも徒のかゝりの時しと結び。ぞのや何のかゝりのとききと結ぶを。下三段は。うちかへしてはも徒のかゝりの時きと結び。ぞのや何のかゝりの時しと結ぶ。此事初学のともがらはまどひやすし。紐鏡と此一の巻の三転証歌とをよく考へ合せてわきまふべし。(p.221)

とあって、こちらでは「むすび」が用いられ、「とまり」は一切使われていない。この違いから考えると、宣長は当初、旧来のてにをは研究書と同様に「とまり」を使っていたが、どこかの段階でそれを「むすび」に改めたと考えることができる。実際、『玉緒』の後に成った『玉あられ』（寛政4〈1792〉年）には、

終りを なき うき のどけき 露けき 寒けき はかなき、又 うれしき

かなしき さびしき 恋しき くやしきなど結ぶ、此 きしきは、上にぞの  
や何の類などのかゝりのてにをはなくては、とゝのはぬことなるを、近き世に  
は、此格にかゝはらず、上にぞの や何のてにをはなくして、き共しきとも結  
べる歌おほきは、いと／＼いやしげにねちけてぞ聞ゆる、古に心あらむ人は、き  
はめてよむまじきことなり、殊にきの方は、しと結べばこともなきを、ことさ  
らにきと結ぶはいかにぞや、たゞ同じこととや心得たるらむ、例のいとみだり  
也 (p.477)

とあって、『玉あられ』には、「むすび」は見えるが「とまり」という術語は一切使  
用されていないのである。これらを踏まえると、『紐鏡』と『玉緒』における終止に  
関する術語の使用数の違いは、呼応に関する宣長の学説が進展していく過程を表し  
ていると考えられる。つまり、「とまり」を用いているのは古く、「むすび」は新し  
いと言うことができよう。

さて、次に問題となるのは、「とまり」から「むすび」への転換時期である。『紐  
鏡』の段階で既に「むすび」が使用されているため、「むすび」が創出された時期を  
明言することはできないが、『紐鏡』で使用されている例を考えると、書名に関わる  
和歌と末尾の解説の後半部分であって、いかにも後から追加しやすい位置にのみ使  
用されていると見ることもできよう。また、『紐鏡』に末尾には既に『玉緒』の書名  
がみえることから、この両書はある程度一体として構想されたものであることはわ  
かるが、そうだとすると、『玉緒』にもっと多く「とまり」という術語が使用されて  
しかるべきである。にもかかわらず『玉緒』では、「むすび」が優勢であり、特に一  
之巻においては「むすび」しか用いられていないことを考えると、『紐鏡』刊行後か  
ら『玉緒』が刊行されるまでの間に宣長の学説が深化したと考えることができる。

## 5 まとめ

以上、終止に関わる術語について宣長以前と宣長の学説を対象として検討を加え  
てきた。その結果、

- ・宣長以前においては、基本的に「とまり」が用いられていること
- ・『てにをは紐鏡』では「とまり」が多く用いられる
- ・『詞玉緒』では「むすび」が多く用いられる

の3点が明らかとなった。学説展開という観点から見ると、この「むすび」と「と  
まり」の使用数の違いは、宣長が旧来のてにをは研究を承けつつも徐々に呼応に関  
する独自の説を確立していく過程を反映したものといえよう。さらに言えば、この  
問題は、『てにをは紐鏡』と『夕の追ひ風』の先後関係を考える上でも、極めて重要

になってくると思われるが、この点については、稿を改めて別に論じることとした。  
い。

## 注

- (1) 尾崎知光 (1983) 『国語学史の基礎的研究』
- (2) 『姉ヶ小路式』を調査した劉志偉 (2012) によれば、「とまり」は解釈する側の視点による用語であり、「とめ」は歌を詠む側の視点による用語との見方が示されている。さらなる検討は必要であるが、今回の調査した限りでは、厳密な峻別がなされているとは言いがたかった。ただ、ゆるやかな使い分け意識がある可能性は否定できないため、この点については今後の課題としたい。
- (3) 山田孝雄 (1943) 『国語学史』 p.615
- (4) 仁田義雄 (2021) には、「係り」「結び」という用語を用いたのは、宣長が最初であるとして、確言はされないものの、「結び」は宣長が創出したという見方を示されている。
- (5) 『詞玉緒』7巻の内、二之巻のみ「とまり」の使用割合がやや高くなっている。そもそも二之巻は、例外的な事象について取り上げたもので、内容自体がやや特殊なものである。さらに、その特殊性に加え、『紐鏡』の末尾に、既に「変格」に対する言及が見えるため、他の巻に比して古く構想されたものではないかと思われ、その結果として、「とまり」の使用割合がやや高くなったと考えられる。
- (6) ただし、完全に「むすび」と「とまり」の間に区別がないわけではない。例えば、「かな」「つゝ」といった、伝統的テニハ伝授の中で重視されていたものについては、旧来のてにをは研究書同様に「とまり」が用いられている。
- (7) 『紐鏡』との先後関係が問題となっている『夕の追い風』には、末尾部分後半の「むすび」が用いられる箇所はみえず、表現は若干異なるもの前半部分のみが書かれている。

使用テキスト (※引用に際しては、適宜句読点を補い現行の字体に改めた)

- 『春樹頭秘抄』：福井久蔵編 (1938) 『国語学大系 第七巻』国書刊行会  
『春樹頭秘増抄』：福井久蔵編 (1938) 『国語学大系 第七巻』国書刊行会  
『てには網引綱』：福井久蔵編 (1944) 『国語学大系 第八巻』国書刊行会  
『氏爾乎波義慣鈔』：福井久蔵編 (1938) 『国語学大系 第七巻』国書刊行会  
『てにをは紐鏡』：大野晋編 (1970) 『本居宣長全集 第五巻』筑摩書房  
『詞玉緒』：大野晋編 (1970) 『本居宣長全集 第五巻』筑摩書房  
『玉あられ』：大野晋編 (1970) 『本居宣長全集 第五巻』筑摩書房

## 参考文献

- 上野洋三 (1978) 「有賀長伯の出版活動」『近世文芸』27・28  
大谷俊太 (2003) 「テニハ伝授と余情-つつ留り・かな留りをめぐって-」『テニハ秘伝の研究』勉誠出版  
尾崎知光 (1983) 『国語学史の基礎的研究』笠間書院

- 尾崎知光 (2012) 『国語学史の探求』 新典社
- 仁田義雄 (2021) 『国語問題と日本語文法研究史』 ひつじ書房
- 船城俊太郎 (2013) 『かかりむすび考』 勉誠出版
- 古田東朔 (1956) 『『和歌八重垣』をめぐって』 『文芸と思想』 12
- 古田東朔 (1968) 『『詞の玉緒』の先蹤としてのてにをは研究書——特に『氏邇乎波義憤鈔』の内容との比較』 『国語学』 72
- 古田東朔・築島裕 (1972) 『国語学史』 東京大学出版会
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』 宝文館
- 山田孝雄 (1943) 『国語学史』 宝文館
- 劉志偉 (2012) 『『姉小路式』 テニヲハ論の研究』 京都大学学術出版会

#### 付記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（22K13135：若手研究「近世歌学資料における言語学的言説についての日本語学史的研究」）による研究成果の一部である。

（こうの・みつまさ 東京都立産業技術高等専門学校准教授）